



## 東プロイセンとベルギー

スヴェン・ヘディン「東方へ」から

東プロイセンが蹂躪されたのはベルギーと同様、大戦初頭の1914年秋のことである。ベルギーの荒廃ぶりについては、のべつまくなしに、うんざりするほど話を聞かされ、嘘を書きたてる本がいっぱい出版された。列強の保護の下これらの書物は世界中に流布し、中立国でもすすんで買う人や翻訳者が現れた。一方外国のどこかが東プロイセンの肩を持って、この不幸な辺境の荒廃ぶりについて文書を公開したなどとは全く聞かない。それどころか、ロシア文化の方がドイツ文化より高く、ドイツ文化が消滅してモスクワの文化と入れ替わったほうが人類のためになるなどと聞いたことがある。この哲学を信じるものがわが国の高緯度地方に住む単純な人々の中にいて、その歴史を忘れ、その過去を否定し、その未来を考えないのである。

私はベルギーと東プロイセンを十分に見てきているので、東プロイセンの荒廃はベルギーに比べ比較にならぬほどひどいものだと請け合える。ベルギーではドイツ軍がその部隊の安全と動きを確保するためにやむをえず村や市街の一部を灰燼に帰せしめた。それは一般市民が戦時国際法に反して勝者に向かって武器を使用したからである。東プロイセンではロシア軍が気ままに全てを焼くつくし、無差別に軍事的な理由もなく破壊を行った。それは特にそこから退却するときであったが、その前にも行われていた。彼らの破壊は懲罰的な措置ではなく、単純に破壊欲によるものであり、昔スウェーデン領であったバルト海沿岸地方をしばしば恐怖と驚愕に陥れたのと同じ猛獣の本能から行われたのである。私は東プロイセンとロシアの国境を7地点通過したが、そこでドイツ文化とロシア文化の違いを見ることができた。ロシア軍は国境のドイツ側では全てを破壊したが、ドイツ軍はロシアとの国境の向こう側では何も破壊しなかった。

ベルギーから報じられていた男女子供に対する残虐行為は虚偽報道であり、ドイツ側の反論は正当なものである。非難は英仏側からなされているが、実証性を持つものはまったくないのだ。ドイツ側の野蛮行為の証拠をあげるために、偽の文書や不適切に訳された文書を提示することも厭わなかったのである。戦死したドイツ兵から奪った手紙を意図的に縮めて、その榮譽に汚点を残した学者さえいた。敗者に対する残虐行為は、ゲルマン人の信念と気質にまったく反することである。一方、ロシア軍の東プロイセンへの侵入はどうであったろうか。私の目の前の机には宣誓署名文書のコピーがうずたかく積まれている。これらは野放しにされたコサック兵によって肉体的苦痛を受け、陵辱された人たちへの尋問調書である。これらを改めて通読して、ほとんどが無理強いによって記述されたものではないことが分かった。それらは恐ろしいまでのリアリズムにあふれ、残虐ぶりが微に入り細をうがって描かれている。ゾラ<sup>1</sup>の『大地』はこれらの文書に比べれば児童書みtainなものである。それ故これらの文書から抜粋するの

---

1 エミール・ゾラ (1840-1902) はフランスの作家。

はやめ、この目で見たり直接経験したことのみ書くことにする。それでも、読者の神経をいたわるよう気遣う必要があるのだが。私の見たことはそれだけで十分に、ロシア軍の侵入とはいかなるものであったかを読者に伝えてくれるだろう。

残念ながら、ロシアの上層部がイワン雷帝とピョートル大帝の習慣からは違うことをしていることを示す明確な証拠はない。例えば第 20 軍団所属第 113 歩兵連隊の指令書からの抜粋を見たことがあるが、そこにはこう書かれていた。「攻撃においてその地の 10 歳以上の労働可能な男子を全員前線の前に追いやるべしとの最高司令官の言葉どおり実行することを命ず」。もし東プロイセンに滞在中に自分自身で読んだのでなければ、そのような破廉恥な行為がありえようとは決して信じなかったであろう。特に退却の際になされた物的破壊は、どうやら何らかの命令に基づいて行われたようである。ロシア人がこの点で軟弱どころではないことは、その後の戦争経過のなかで自分自身の土地を荒廃させていくことに示されたことである。ある場合にはそれが戦術的な理由からなされた。すなわちあらゆる食料がそなわった手の付いていない町や村、農園を手にして敵が有利となるのを防いだのである。燃やし方にも様々なやり方があるが、ロシアのやり方については全く無意味なものであると安んじて言える。その軍事的な意図はカール十二世<sup>2</sup>と戦った戦役において全く達成できなかったし、鉄道によって作戦基地からの距離を縮められる現在においては尚更そうなのだ。そのやり方ひとつひとつの粗暴さは、とても弁護できるものではない。しかし残念ながら明らかとなったことだが、そのようなものは、しばしばロシア軍将校団のある種の要素の典型的特徴であったのである。

平均的ロシア人は大きな子供だと言われる。愛すべきやさしさと善良さを持つが、子供の残酷さをも持っている。しかし私は平均的ロシア人、とりわけ小ロシア人はこのような幼児的・原始的に残酷さを喜ぶことからは

---

2 スウェーデン国王（在位：1697 - 1718）。ザクセン選帝侯、ポーランド、デンマーク、ロシアの連合と戦った。ロシアのピョートル大帝と敵対していた。

ほど遠い人たちだと確信している。その反対に心優しい人たちなのである。残酷さがコサック人の突出した性格だとは全く思わない。しかし、このアジア的あるいは半アジア的集団が戦争の中で放たれると、彼らの中に猛獣が目覚めるのである。

さて、東プロイセンでの破廉恥行為が全体として将校の意志に反して行われたものとするならば、ロシア軍内部の規律について驚くべき印象が生まれてくる。これに対し、ドイツに占領された国々の民衆が兵士の残酷な行為を訴える動機となることはこれっぽっちも無かったのである。私は、これによって規律の悪さが今ロシア軍の際だつ特徴と言っているわけではない。満州侵攻の終結後革命プロパガンダによってあらゆる絆がくずれ、軍隊規律がすべてくずれそうになってからさほど時は経っていないが、ロシア軍の内的状態はまちがいなくかなり強固な状態に達している。しかし軍紀は未だ憂慮すべきほどであって、東プロイセンの荒廃と略奪はその生々しい実例となっている。

ロシア軍がドイツ国境を越えたとき、次の「東プロイセン住民全員への布告」がなされた。

「8月4日から17日にロシア帝国軍はプロイセン国境を越え、ドイツ軍と戦いながら前進を続けている。全ロシア人の皇帝の意志は平和な住民を保護することである。

最高位者より私に委ねられた全権により次の布告をする。

1. 住民からのロシア帝国軍への抵抗は何であれ、男女年齢の区別無く罰せられる。
2. ロシア軍に対するどんな些細な襲撃であれそれが行われたり、またロシア軍の命令に対する抵抗がなされた所はただちに焼き払う。
3. もし東プロイセンの住民が敵対行為を行わないならば、どれほど些細なものであれ、ロシア軍に対する奉仕には十分な支払いと報酬を受ける。その地は保護され所有権は守られる。

署名：皇帝陛下直属高級副官、騎兵隊総司令官  
フォン・レネンカンブ 」

第2項をベルギーで起きた事と比較して欲しい。外国は、ドイツ軍が戦争法を非常に厳しく適用したと強く非難した。しかしロシア軍が同じ法律を同じ厳しさで適用したとき、どこからも責められなかった。なぜか。憎むべきドイツ文化とドイツ軍国主義を叩くものなら、何でもいいからだ。ドイツに対してはあらゆる手段が許される。「ナンセンス野郎」、「フン族」、「野蛮人」を根絶やしにするというような高い目標があるのだ。実際にはこの不公平さへの根底にあるのは憎しみではなく、恐れと悪意でしかない。ドイツは平和の時期に他国に比べあまりにも大きくなりすぎた。それゆえに、どれほどの代償を払おうと絞め殺すべきなのだ。協商側の国はイギリスの吹く笛に合わせて踊っているのである。

## 収容所展望

これで4週間、収容所内に拘束されていたことになる。この制約は、収容所内ではゲームもスポーツもできないだけに身にしみる。コレラは幸い終息に向かっているそうなので、もうすぐ野外で思いっきり身体を動かすことができるだろう。クスノキの間の短い区間をゆっくりと行ったり来たりするのは、すぐに飽きてしまう。収容所に和やかな雰囲気醸し出す、ニワトリやアヒルの行動につつましく見入っていることもできる。しかし、いったん詳しく知ってしまうとそれをやめるのは難しい。収容所の施設はどんどん改善されていく。まだまだ長期間逗留せざるを得ないのであるから、改善はなんにせよ歓迎できることだ。食事代が一人当たり一日5銭引き下げられたことで、生活が極めて切り詰められたものになっている。およその計算をしてみると、収容所内でパンを製造すれば本質的な節約効果

があることが分かった。専門家がいらないわけではないので、近々収容所製パン所が作られることになった。これはパンだけを焼くのではなく、小型パンやケーキへの需要も多くある。これらを販売することによって公共の福祉に役立つ収益が得られるであろう。

パン屋の他に洗濯屋も計画されているそうである。少なくとも小規模ではあるが、いくつか洗濯請負が成功している例がある。日本製石けんの「結構な品質」を考えると、ドイツ人にはそれらを追放するのはきっと難しくないであろう。

この前の雨の後、気温がぐっと下がり、温度計が連日 30 度を示していたところに比べて、20 度を少しこえるくらいであってももう寒いくらいである。夕方から晩は涼しく快適であるので、今年の夏は峠を過ぎたのであろう。昨年と比べると、われわれの住む木造建築を基礎から揺らしたような本物の台風がまだ来ていない。雷雨もまれであった。この前の雷雨のとき雷が、最近俘虜のためにカトリックミサを行った、スペイン伝道教会<sup>3</sup>の屋根にあった石造の十字架を破損した。きっとこの事件は、そうでなくてもかなり勢いのなくなった伝道にとって非常に障害になる。

故郷からの郵便の波は引き、家からの郵便を受け取るのはまた何週間も先のことであろう。外に向けた手紙は、従来その回数だけが制限されていたが、これからは枚数も制限され、たった 1 枚にしか書けなくなる。これまでは大抵の者が目一杯、ここの状況について書いてきたので、重要な事実しか書けなくなると、とてもつらいことになるだろう。手紙を書くことを、思考の交換やまして授業のために使ってはいけないというわけだ。

---

3 現徳島カトリック教会、当時の司祭はスペイン人ホセ・アルバレス。

## 図書

最近、当収容所の図書目録にかなり広範囲にわたる追録が出された。

前回の報告以降、贈書が何度かあった。その中から、特にハンブルクのドイツ作家記念財団からの 40 巻以上にもなる贈り物を取り上げたい。これは青島総督府学校元教師のゲルラッハ氏の好意あふれる仲介によるものである。

青島のヴィルヘルム師からは、フェリックス・ダーンの歴史小説『ローマをめぐる戦い』をいただいた。これはわれわれの蔵書に貴重な追加となるものである。

これ以外の本については、すでに人々に配られた追録の中に書かれているので、ここでは紹介しないこととする。

## 青島戦（5）

マットはすでにちゃんと置かれていたので、後はカバーと毛布をそなえるだけであった。さらに各人のベッドには蚊帳を吊る必要があった。というのも、それがなければ蚊がたくさんいる中、寝るなどとても考えられないのである。蚊帳を吊るのは、われわれが泊まっている納屋がとても高くて固定する場所がどこにも見つからず、困難なことであった。だから仲間がいかに巧みに困難を克服することができたのかを観察するのは興味深いことであった。ある者は椅子と長いすを持ってきて、その背もたれに蚊帳を固定し、その座面には全体をしっかりと固定するべくリュックサックと弾薬を置いた。またある者は太い枝を数本切り取ってきて、両端で交差させて立てかけ、それに棒を通した。すると蚊帳は三角形のように天辺がとがった形になるのだった。またある者は細紐を使って、その両端に石をくくり

付け、それを頭上高くにある梁に放り投げた。そうすることで蚊帳を吊す手がかりをこしらえたのであった。このように一風変わった状況で作られた宿営の眺めが独特の雰囲気であったことは容易に思い描けよう。この納屋からほど遠からぬ所に、生粋のバイエルン方言を話す小粋なミュンヘン女性の経営する「レージ」というレストランがあった。金に余裕があれば、そこで「うまいビールを一杯やる」機会を逃す者はいなかった。ずうっと歩いてきて全く疲れ切っている、なかなか寝付かれなかった。どこからか蚊帳の隙間をくぐって獲物に近づいてきた無数の蚊に蒸し暑い空気、さらにはおそらく慣れない寝床のために人々はなかなか眠れないのだった。眠りの神の格別の恩寵にあずかれるのはほんの少数で、彼らは彼らですぐにまるまるひとつの森をのこぎりで切っているような大いびきをかきはじめて、寝入ったことを教えてくれるのだ。

### 「皇帝がやって来る」

翌日の朝は、兵士にはほとんど馴染みのない完璧なやすらいだ気持ちを味わうことができた。われわれはこの時間を使って寝床をある程度ちゃんとしたものにしたが、何人かは何もないところから豪華なものを作り出す才を見せた。午後になると、もうすぐ皇帝がやって来るぞと言われた。もちろんこんな知らせを私は信じず、笑い飛ばして歩いていこうとした。しかし兵士たちはそれは本当のことなんだと請け合い、私自身もすぐにそれが正しいことだと納得したのであった。4時に中隊は李村川右岸、中国人学校の前に四角隊形をとって止まった。テーブルがひとつ運ばれてきて、中隊長と将校の居並ぶ中、曹長が下士官と兵卒に当期の給与の支払いを始めた。金がテーブルの上に並べられたとき、私は皇帝が本当に青島だけでなく、個々人のもとへやって来たことを知ったのであった<sup>4</sup>。

---

4 金貨と銀貨には皇帝フリードリヒ二世の肖像が刻印されていた。

## 日本の最後通牒

ここへ来てはじめて、日本の最後通牒について明確な話を聞いた。その内容を以下に記す。

わが国にとって現下の状況において、極東の平和を阻害する原因を除去し、日英同盟が目指す共通の利害を確保するための措置を執ることが、日英同盟がその維持を主目的とする東アジアの堅固かつ持続的な平和を確保するために、非常に重要かつ不可欠である。日本帝国政府は、ドイツ帝国政府に対し以下の二つの提案を実行するよう勧告することを率直な義務と考える。

1. ドイツの全ての軍艦とあらゆる種類の補助巡洋艦を、ただちに日本及び中国の水域から引き上げること。それが不可能な艦船については武装解除すること。
2. 9月15日までに無条件かつ無賠償で膠州の租借地全体を日本帝国官憲に引き渡すこと。場合によっては日本帝国官憲はこの租借地を中国に返還する。

日本帝国政府は同時に、もしこの勧告の無条件受け入れを表明するドイツ帝国政府の回答を1914年8月23日までに得ない場合には、状況に鑑み必要と考える措置に踏み出さざると得ないことを通告する。

答えがないことも答えとなる。この恥知らずな挑戦に対し、予想されたとおりドイツ政府は回答を出さなかった。こうして日本は勅令によりドイツに宣戦布告した。

## オーストリアの宣戦布告（日本に対する戦争）

ドイツの忠実な同盟国として、オーストリア・ハンガリーも日本に宣戦布告した。これによってオーストリア・ハンガリーの巡洋艦「カイゼリン・エリーザベト」が青島に留まり、その300人の乗組員も共に防衛の任につくこととなった。

## 総督令

点呼の際に隊長が読み上げた総督の発した布告は、以下の通りである。

つづく



## シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アンツアイ  
ガー』第3巻第17号  
(1916年9月17日)  
ユーモア付録



## フェルディナンド王<sup>5</sup>

「宮廷写真家殿、勝利者のポーズを  
取るから急いで写真を撮ってくれ。  
いつ何時手遅れになるか  
分からんからな」

5 ルーマニア国王（在位 1914 - 1927）

## 誕生日

世の光りを初めて目にした日を  
祝う人間よ。

友人からの祝いのことばにプレゼント、  
それらによって、こんな事実を思い起こすわけだ。

つまり、こんなにもとても短い人生の期間で  
またしても早1年が過ぎ去ったことを。

思うに、こんなことを考えると  
誰しもかなり辛いものがあるはずだ。

ところがどっこい、この日に浮かれ騒ぐ  
というのが一般的な習慣なのだ

この習慣は良いものであり、すばらしいものだ。

というのも、事実喜びに身を任せるというのは  
誕生日にふさぎ込んでいるよりは

ずっと気持ちのいいものだからだ。

しかし君たちにひとつ言っておきたいのだが、

喜び方には違いがある。

楽しく、だが静かに祝う

人がいるが、

一方では、うるさく

がなって祝う人がいる。

酒を飲んで、気の向くま

ま





喉も心も満ち足りるまで歌を歌う。  
別のやつは3日間も酔っ払って  
とてつもなく騒ぎ立てるのだ。  
水兵ピアノ<sup>6</sup>に向かって歌う—いや、どなる。  
でもって、壁と天井はひん曲がり、  
2、3日後にはついに  
水兵ピアノも声帯もだめになってしまう。  
このもったいぶった詩で  
この方々に向かい  
私は是非ともひとつだけお願いしたい。  
考えて欲しいのだ。君たちだけがここに  
暮らしているわけでないこと  
君たちの歌を200人もの人々が聞かざるを得ないことを。

---

6 アコーデオンのこと

人の迷惑になるかもしれないと、

考えたことがこれまでにあったか。

そうかい。じゃ、これからは考えてくれよ。

今度また誕生日がめぐってきたら

くつろいで、ゆったりとビールを飲んでくれ、

そしたらみんな喜んで、おめでとう、と言うよ。

### ルーマニアに

舞踏会の中に君の姿を見て

心が苦しいよ

君なくもがなの一踊りを後悔して

戻っておいで

文化

この詩は今日これまで以上に正鵠を得ているものであるが、出典は 1913 年 7 月 1 日発行の『ユーゲント』誌第 28 号である。